G4 ができるまで
——編集工程アラカルト

校閲について

小林資忠

『ジーニアス英和辞典』の初版発行は1987年だから，すでに19年が経つ。この間，語法を中心に様々な改良を行ってきたが，今回の第4版(G4)ではこれまでで最大の全面改訂を施した。語義展開図やシノニム欄などの新しい「目玉」については当該の項などを参照していただくとして，本稿では校閲者の立場から，主に，コーパスをいかに利用したかについて述べたい。

もちろん用例などはコーパスのみで編集をしたわけではないが（こちらも別稿参照），辞書全体に関係する大きな変化として，コンピュータ・コーパスを多方面にわたって使用したことはやはり特筆に値するだろう。特に校閲にあたっては，現在の語彙の使用頻度をいつも念頭に置いた編集を行った。今までの多少散発的なコンピュータ・コーパスの使用に比べ，G4での徹底的な利用には目を見張るものがある。1億語を超えるアメリカ英語に基づいたG4コーパスを構築し，すでに機能しているBNC，Googleなども参考にした上での辞書記述は，各語彙の現在の使用状況をより客観的に，しかも的確に示すことになり，より信頼の置ける辞書になったはずである。

見出し語のランク（A〜D）の見直しや語義の頻度順による提示は，コーパスを中心に調査した成果である。G3から引き継ぐ用例やG4からの新規用例については，当然ネイティブチェックを受けながら検討を重ねたが，その提示の仕方は，コーパスの頻度データに基づき，学習英和辞典として最も妥当と思われる典型的な形で示すよう注意を払った。

例えば，用例中の名詞，形容詞，動詞などの類義語の配列，前後に続く前置詞や副詞の配列は，コーパスを尺度として頻度の高いものから順に並べてある。名詞glance ❶の「ちらりと見ること」の用例にShe cast［shot, threw］a disapproving glance at me.があるが，最初のcastが最も連結の頻度が高い動詞ということだ。動詞grab ❶の用例，He grabbed me by［in, at, on］the collar.に見られる前置詞の配列でも，byが最も頻度が高いということである（実際はbyとそれ以外では頻度に大きな開きがある）。これは特に発信の際に，使用者に役立つ情報だろう。

成句についても頻度を尺度とした削除や追加を行った。例えば，G3ではmuchの成句How much . . .?の⑵に「《略式》(相手の言ったことが聞き取れなくて)何ですって(what)」とあったが，この表現は複数のインフォーマントから聞いたことも読んだこともないと指摘され，またコーパスによる実例も確保できなかったので削除された。もう1つ。close 圖の成句close toの⑸に「近くに[で]」とあり，I saw him close to.(彼を近くで見た)という用例が掲載されていた。これを裏付ける用例は*OALD*[7]にもThe picture looks very different when you see it close to.として示されている。しかし，英米それぞれのコーパス・データを見ても〈see＋人＋close to〉の用例は見つけられず，インフォーマントの意見も「文法的ではあるが，稀な語法で学習英和辞典には向かない」ということであった。つまり，この用法はたとえ*OALD*[7]に記載されていても珍しい例の1つと考えられ，削除対象になった。

以上，コーパスが辞書編集に大きな影響を及ぼす例をほんの少し眺めてきたが，これからの辞書編集に当たっては，⑴執筆者・校閲者・編集部スタッフの緊密な協力体制，⑵辞書利用者からの建設的な意見や情報の提示，⑶公正な判断のできるネイティブスピーカーの協力に加え，⑷コーパスの適切な利用が必須となり，これらの大きな4つの歯車がうまくかみ合った場合に，信頼のできる，優れた英和辞書ができ上がるような気がしている。（こばやし　よしただ・愛媛大学教授）

素読み作業について　垣添朋美

「素読み作業」とは文字通り，校正ゲラの記述内容を読み返す地味な作業である。この作業は，不備な点を見つけることはもちろんだが，合わせて，さらに改善するための指摘をすることが求められる。その際の視点は，「使用者（特に高校生）が理解できる内容であるか」というものである。ふだん高校生に英語の指導を行っている経験を活かし，学習者に使いやすい辞書への改良を目指すのである。素読みにあたって特に重視したポイントをいくつか，以下に紹介したい。

1．語法記述の見直し

語法で定評のある『ジーニアス』だが，いくら有用な記述でも使用者に理解されるものでなければ意味がない。そこで，説明の仕方がわかりにくいものや内容が高度すぎるものなどについては指摘し，校閲者による見直しをお願いした。

また，見やすさも重視した。『ジーニアス』では，簡潔な語法解説を語義中の《◆…》で表し，まとまったものは語法という形で，赤枠の「囲み記事」の形をとっている。「語義中解説」は語義確認の流れで語法も確認できるという利点がある。しかし，高校生のような学習者にとっては，視覚に訴える「囲み記事」のほうが見やすいようである。したがって素読み作業では，「語義中解説」の中でも学習者に有益と思われるものについては，解説を充実させ，「囲み記事」へ変更した。また，「囲み記事」には可能な範囲で「見出し」をつけ，高校生レベルの使用者にとっても見やすい語法解説になるよう見直しを行った。

2．語義の見直し

学習者が辞書を引く一番の目的は，語義の確認であろう。そのため，語義の見やすさ，分かりやすさは重要である。『ジーニアス』では，重要語は見やすいよう太字語義による記述がなされているが，素読み作業ではそれらを再検討し，太字語義を追加・変更した。また，特に高校生にとって重要かという観点から，難解と思われる語義については分かりやすい語義に変更し，専門用語で説明不足な語についても，スペースの許す限り《…》による注記を付け加えた。

3．用例の充実

私自身，普段の辞書指導では，語義のみにとらわれず，用例にも目を通すよううるさく言っている。特に初期の辞書指導では，「用例の中にもたくさんヒントがあるよ」と何度も繰り返す。それは，どうしても学習者は語義のみにとらわれて，和訳の仕方に悩んだり，不自然な語の組み合わせの英作文をすることが多いからである。コミュニケーション能力育成重視の現在の英語教育に適した用例はG3にも多く見られるが，G4においても，コーパスや諸英英辞典を参照した発信に有用な用例への差し替えが行われている。さらに素読み作業では，有用なコロケーションを含む用例が盛り込まれているかに特に重点を置き，それらの用例の最終チェックを行った。

＊

今回の作業では，最初に述べたように学習者（特に高校生）にとって使いやすい辞書になるよう努めた。現在のコミュニケーション能力育成重視の英語教育に対応した「発信型」用例，また大学入試対策にも役立つ充実した語法解説など，G4がこれまで以上に英語学習の手助けとなれば幸いである。

（かきぞえ　ともみ・大阪商業大学高等学校非常勤講師）

つづり確認調査について　山埜茂彦

「1語か2語かハイフン付きか」については，英英辞典においても記述に揺れがあり，必ずしも実態に即した基準とは言えないようである。編集部では早くから頻度差およびそれを反映した見出しのあり方について検討がなされていた。今回，G4においてそれを実現するため，コーパスと検索エンジンを併用した，つづり確認調査の依頼を受けた。

英系コーパスとしては，The British National Corpus（BNC）World Editionを用いた。米系コーパスとしては，編集委員の中邑光男先生により構築されたG4 Corpusを用いた。各コーパスの内容は本誌の中邑先生の記事を参照いただきたい。検索エンジンはGoogleを用いた。

調査対象は，分離複合語（主に名詞＋名詞），1語化した複合語，ハイフン付き複合語，異綴語とした。例をあげると，上記3媒体でbaby sitter, babysitter,

baby-sitter のそれぞれについて出現数の調査を行い，比較検討するわけである。そして，英米による差，頻度差の大小，等によって見出しの表記を見直した。ただし，Google はたとえ allintext: 検索を行ったとしても，商業ベースの簡略化した表記や各時代の文学作品なども含むあらゆる“text”を対象にしているわけで，検索結果（数値，2語とハイフン付きのばらつき）についてもそのあたりを考慮する必要がある。とは言え，ドメイン制約検索のように細分化した検索では語彙の偏りや母数自体の不十分さが否めない。そこで Google の結果については，あくまで傾向をつかむ1つの資料という観点で活用することにした。

BNC が構築されてからの年月を考えれば，新たな表現や使用頻度差が生まれていることも推察されるが，ともあれ英米2つの1億語レベルのコーパスを駆使した調査を網羅的に行い，言語使用の実態を見出しに反映することができた。「どのつづりが一番多用されるのか」という，学習者の素朴な疑問に答えられる見出しの表示ができるようになったことが，最大の成果であろう。

（やまの　しげひこ・京都府立嵯峨野高等学校教諭）

ネイティブチェックについて　Gerry Shannon

Editing a respectable dictionary like *the Genius English-Japanese Dictionary* takes a lot of courage. After all, many highly knowledgeable people have been involved in creating the dictionary, checking for accuracy and writing example sentences that will be useful to the users of the dictionary. My job has been to change what I feel are errors, poorly written example sentences and removing expressions or examples that I think do not truly represent how the words are used today. In doing this, you are bound to bruise some egos. Well, so be it.

Language is a dynamic system of communication. How words are used changes over time and new words and expressions are constantly being added while others fall out of use. I have tried, to the best of my ability, to keep my editing true to how English is used today and where I have wanted to make changes, I have consulted references and scholars to confirm my beliefs. When I have found examples, even examples that may have been correct ten or twenty years ago, that are not used today or are used in different ways, I have changed, or removed and replaced them with more useful and more likely examples.

This is a rewarding task because I feel that I am contributing in a significant way to how non-native speakers of English learn to use the language. As an educator, I realize the importance of presenting clear and useful information and not to unintentionally mislead students into believing something is true if it is not. Students must be presented with examples that will clearly and unambiguously guide them in improving and expanding their knowledge and skills. In my editing task, I have always keep the students' perspective in mind in the belief that this will lead to a more useful and accurate representation of how the English language is currently used.

I recommend this dictionary to my students and I recommend it to you. We have striven to present the most accurate and the most authoritative English-Japanese dictionary available today. I hope you enjoy it.

（平安女学院短期大学部助教授）

語法情報のまとめ方　白木晴子

辞書を改訂する作業の1つに，語法情報を見直すというものがあります。一口に語法情報と言っても，辞書には，［SVO doing］といった文型，《米略式》のようなレジスター，〈人が〉のような選択制限，《◆…》で表されている注記など，様々な情報があります。

『ジーニアス英和辞典』は語法情報の豊富さを誇っていますが，この度の第4版への改訂のために大いに参考にしたのが，雑誌『英語教育』の中の“Question Box”（QB）というコーナーです。QB は，読者の皆さんからの語法等に関する質問に答えるコーナーです

が，『ジーニアス英和辞典』の語法情報についての鋭いご意見・ご指摘もたくさんあり，辞書の編集主幹から「次回改訂の際には訂正（検討）します」という約束がなされることもしばしばあります。

紙幅の都合上，2，3のみご紹介します。

QBでご指摘を受け，語義が間違っていることが判明したことがあります。例えば，contemptは「恥辱，不面目」という語義から，第4版では「軽蔑されること，屈辱（状態）」に訂正しました。また，on 前⓬では，［（交通）手段・器具］にA car runs on gasoline.の例がありましたが，こちらもご指摘を受け，新たに［動力源］という語義分類を設けました。

語法情報の見直しは，もちろん，間違いの訂正だけではありません。言葉は変化していくものです。世の中に新語が登場し，辞書に収録語が取捨選択されていくように，語法も時代を経て変化します。例えば，soapはa cake ofをつけて数えると昔は教えられていましたが，この表現は現代英語では稀になってきています。今はa bar ofをつけて数える方が普通のようです。では，この改訂でa cake ofの表現を削除してしまうのかといえば，そうもいきません。稀ではあれ今も使われる表現であり，また高校の問題集ではまだa cake ofを答えさせるような問題も出題されているからです。結局，第4版ではa cake ofには《やや古》を付して残しました。

このように，現代英語の実態を反映させつつ，少し昔の英語を扱う入試問題にも対応させなければならない…。なかなか難しい問題です。こうして，誰も気づかないところで様々な葛藤を繰り返しながら，辞書は改訂されていくのです。

（しらき　はるこ・大阪国際大和田高等学校非常勤講師）

見出し語のランク見直しについて　編集部

『ジーニアス英和辞典』は見出し語のランクについても改訂のたびに小規模の見直しを行ってきたが，英語自体の変化や教育環境の変化についていけない部分があった。第4版では，コーパスを駆使して実際の使用頻度を確認し，現代の日本人英語学習者にとって重要な単語は何かという観点から抜本的にランクの見直しを行うことにした。

見直しにあたっては，担当の先生に次のような作業による原案を作っていただいた。

1．第1段階（基本ランクの決定）

⑴ A，B，Cランクの決定：市販されている様々な英英辞典の定義語彙，British National Corpusの頻度表（6300語），独自に構築したコーパスをもとにして作成した頻度表（62500語）等を比較検討しながら，A〜Cランクの候補語彙を決定する。

⑵ Cランクの再チェック：⑴で得たCランク候補語彙について，ビジネス関連語彙が十分入っているかを調べるため，大修館のTOEICシリーズ3冊に出てくる語彙の頻度表を作成し，それに入らないものを抽出して，そのランクを再検討する。特に頻度数の低いものはDランクに落とす。

⑶ Dランクの決定：G3のDランク語彙（約69400語）のうち，BNC Sampler頻度表（46000語）にないものを抽出し，そのランクを再検討。

2．第2段階（補正作業）

第1段階終了の時点で，G3の見出しの中でランク変更が行われた語は全部で864あった。今度はこの864語を対象に次のような補正作業を行っていただいた。

⑴ 中学学習語彙の復活：現在中学校で使われている教科書（7種類）に現れる語彙3470語の中にありながら，第1段階で降格になっているものはG3のランクに戻す。

⑵ 高校生用基本語彙の見直し：日本で公開されている語彙リストの頻度順上位4500語のうち，第1段階でCランクになっているものをBに上げる。

⑶ 生活語彙の見直し：アメリカで出版されている生活語彙辞典にありながら，G4ランクでCランクになっているものをBに上げる。

⑷ ジャーナリスティックな語彙のチェック：コーパスを使用するとどうしてもジャーナリスティックな語彙が多くなるので，第1段階で不当にランク上げされていると思われる語彙を拾い出し，適宜格下げを行う。

以上の作業で原案が完成。それを校閲段階でさらに複数の先生に微調整していただき，新しいランクが決定した。